

## 社研月報 400 号記念に寄せて

宇 都 榮 子

私が専修大学へ入職することが決まったとき、研究仲間から「専修大学に就職できるっていいね。社会科学研究所があるんだから」と羨ましがられたことを、今思い出す。しかし、自分自身が社会科学研究所（以下社研と略）の所員となるということは考えていなかったように思う。なぜなら、当然、社研は専任の所員によって成り立っていると考えていたからである。1977（昭和52）年4月に入職した私は、学内のことが少しづつわかってくるうちに、社研専任の所員という人はなく、各学部の専任教員を中心として兼任しており、2名の推薦者をつけて申し込みをすることができるということを知り、社会学の芥川集一先生に推薦をお願いし所定の手続きを経て所員に加えていただいた。専修大学も、日本の多くの大学がそうであったように、当時女性の専任教員は少なく、専修大学全体で7名（現在でも29名）であり全く男性社会であったから、偶然の巡りあわせで、私は、社研創設以来最初の女性所員になったように思う。

合宿研究会などの社研の活動に参加させていただいていたが、そのうち事務局員を務めるようにといわれ編集担当を務めることになった（社研40年史には出ていないが記憶違いではないと思う）。今回、400号記念の月報に小文を寄せるようにといわれ、確か、200号記念の頃、社研事務局員だったのではないかと思い、もう、それから200号もたったのかと思うと、「すごいなあ！」の一言である。もしやして私の記憶違いではと調べてみたが、200号は私が専修大学に赴任後3年目頃に作成されていた。編集担当として森宏編集長の下、月報を担当したこともあるが、毎号担当というわけではなかったもので、他の編集担当所員並びに所員の皆様のご協力を得て責任を果たせたように思う。私は文学部に所属しているので、人文科学研究所にも所属し、その運営委員として月報を担当したこともあった（人文科学研究所は年6回刊行）。年6回でも青息吐息で発刊した経験があるので、毎月発行し続けることの大変さと思うのである。何とか社研のように文字通り月報にできないものかと考えたこともあったが、直ぐにあきらめたことを思い出す。

さらに社研月報が所員の研究などの発表の場として号を重ねていくことを願うと共に、1号1本くらい、所員の最近の研究関心を掲載するコーナー（4,000字程度）をもうけたらどうであらうかと思ったりしている。